

横井小楠 —その業績と生涯—



1603年に徳川家康が幕府(将軍が政治を行う役所)をつくって以来、江戸は日本の政治の中心地となりました。約260年間続いた江戸時代には、幕府や各藩から選ばれた有能な青年たちは江戸に集まり、学問に励みました。小楠も肥後藩の推せんにより江戸に留学しましたが、どんな人たちと出会ったのでしょうか。



▲小楠が通った熊本～江戸(豊後路)のコース

3 江戸留学

小楠に肥後藩より江戸留学を命じるとの報せが届いたのは、天保10年(1839)3月、31歳の時です。当時、藩では自由に留学することは許されず、藩命を受けて留学できることはたいへん名誉なことでした。小楠はさっそく旅装を整え、3月末に江戸へ旅立ちます。熊本城下を出発した小楠は、大津・阿蘇を経て豊後路(現在の大分県)を通り、鶴崎(肥後藩領・現在の大分市)に着きました。鶴崎では、当時郡代*であった兄の時明と久しぶりに会い、語り合ったといいます。鶴崎港からは船で瀬戸内海を渡って大坂・京都に行き、東海道を通って、4月中旬に江戸に着きました。

さて、小楠の江戸留学の目的は、天下の大学者を訪ねて講話を聴き、諸藩から江戸に来ている優れた人たちと知り合って、意見を交わすことでした。5月に入ると、大学者の訪問を始めますが、江戸で特に優れている人物として、松崎慊堂や藤田東湖を挙げています。

松崎慊堂は肥後国出身(現在の御船町生まれ)の儒学者です。当時69歳の慊堂について小楠は「学問が広くて深く、知識が豊富です。性質も穏やかな人です」と言い、江戸に居る学者では慊堂が最高と評しています。

藤田東湖は、徳川御三家である水戸家の藩士です。藩主徳川斉昭のそばに仕えて藩政改



▲松崎慊堂(御船町提供)

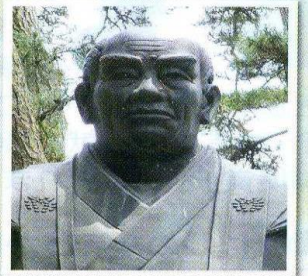
革などに力を尽くし、その思想は尊王攘夷派*に影響を与えた人です。小楠は東湖のことを「話しぶりがさわやかで、優れた意見を持ち、理論より事実を大事にしている。東湖のような人物は他にいない」と激賞していて、たびたび訪問しては語り合い、気心の合う間柄であったようです。

12月25日、水戸に帰る東湖は忘年会を催し、小楠はじめ諸友を招きました。小楠はその席上で、「今夜は国を憂える同志の集まりであるから、率直に政治論をたたかわせよう」と言い、酒を飲みながら論じ合いました。ところが、翌11年2月9日、突然、肥後藩江戸留守居役*から小楠に帰国の命令が下りました。その理由は、先の忘年会の帰りにさらに酒を飲み重ね、藩外の者とトラブルを起こしたからだといいます。酒による過失が原因で志半ばに江戸を去ることとなったのです。

*郡代…郡を治める藩の役人

*尊王攘夷派…天皇を尊び、外国を排除する考えをもつ人々

*江戸留守居役…幕府と大名諸家などの連絡や交渉、情報収集に当たる藩の役人



▲藤田東湖
(茨城県大洗町提供)

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。